

第34回

## 儀式や式典の音楽 ～日本の音楽（5）～

### 学習のねらい

今回は、私たちが人生のさまざまな場面で出会う儀式や式典を通して、日本の音楽にふれてみましょう。取り上げるのは、古くから行われてきた仏教法会や、全国各地に多くの種類が存在する神楽などの宗教的な儀式に使われる音楽です。そこでの音楽の役割を知り、私たちが身近に体験する儀式や式典での音楽の使い方も考えてみます。



講師  
塚原 康子

### 儀式に使われる音楽に目を向ける

奈良の東大寺で3月に行われる「お水取り」（正式の名は修<sup>しゆ</sup>二<sup>に</sup>会<sup>え</sup>）という仏教法会<sup>ほうえ</sup>の中で僧侶が唱える声明<sup>しょうみょう</sup>の一つを聴いてみましょう。法会のような宗教儀式は祈りや願いを形にしたものですが、ここにも豊かな音楽世界が広がっています。

日本の歴史上きわめて名高い法会に、752年（天平勝宝4年）に東大寺で行われた大仏開眼供養会があります。この儀式の中心は、完成した大仏に眼を点じて命を吹き込む作法でした。大仏殿の中には、この開眼作法にあたった菩提僊那<sup>ぼだいせんな</sup>らの外国の高僧や、大仏建立を発願した聖武太上天皇、孝謙天皇らが並び、大仏殿の外では、一万人規模の僧侶が唱える声明のほか、日本の歌や踊りと外来の楽舞が次々に捧げられました。いわばマルチチャンネルの壮麗な音楽や舞踊の響きやリズムで、大仏誕生の喜びを表現したのです。

### 儀式や式典での音楽の役割を知る

平安時代には天台宗と真言宗が創始され、以後の基盤となる法会の形が作られました。比叡山延暦寺に伝わる天台宗の法会から、儀式の場を鎮め浄める音楽を聴いてみましょう。《云<sup>うん</sup>何<sup>が</sup>唄<sup>が</sup>》という曲を独唱しているところに、《散<sup>さん</sup>華<sup>げ</sup>》という曲が唱えられ、思いがけない音の重なりが生まれます。

法会では、古くは雅楽と声明とのコラボレーションが盛んに行われました。また、「鳴らしもの」といって、太鼓や鉦<sup>かね</sup>・銅鑼<sup>どら</sup>などの打楽器もふんだんに使われます。これらは儀式の進行の合図や区切りに鳴らしたり、音楽のテンポや調子を整えたりする役割があります。曹洞宗の総持寺に響く鳴らしもの数々を聴いてみましょう。

つぎに神楽<sup>かぐら</sup>の音楽です。神楽とは神々に捧げる芸能のことで、日本各地に数多くの種類が伝わっていますが、内容は多様です。神様を迎え、もてなし、お送りする神楽を、一晩かけて行う所もあります。宮中に伝わる御神楽<sup>みかぐら</sup>、数多くの神楽歌からなっています。その最後に歌われる《其駒揚拍子<sup>そのこまあげびょうし</sup>》では、神楽笛<sup>ひちりき</sup>・箏<sup>わごん</sup>の伴奏で、笏拍子<sup>しやくびょうし</sup>を打ちながら、荘重で力強い男性合唱が拍子によって歌われ、長い儀式の最後を締めくくります。

つづいて東北各地に分布する山伏神楽<sup>やまぶし</sup>から、岩手県に伝わる早池峰神楽<sup>はやちね</sup>を取り上げます。早池峰神楽<sup>はやちね</sup>は、大償<sup>おおつぐない</sup>と岳<sup>たけ</sup>という二つの集落の神楽からなります。大償で神楽の始めに舞う「式舞」の一つ、《鳥舞<sup>とりまい</sup>》という曲です。御神楽とは全くスタイルが違いますが、どちらも大変魅力的です。

能・狂言にも、1曲だけ《翁<sup>おきな</sup>》という特別な曲があります。天下泰平、国土安穩、五穀豊穰など、人間が生きるうえで基本的な祈りと願いがこめられた曲で、江戸時代には演能の最初に演じられ、現在でもお正月や能楽堂のこけら落としなどに上演されます。《翁》では前半に翁、後半には三番叟<sup>さんばそう</sup>という人物が登場して祝福を述べ、舞を舞います。その中から三番叟の舞の始めの部分を聴いてみましょう。能管・小鼓・大鼓が特徴的なリズムを繰り返します。

## 身近な儀式や式典での音楽の使い方を考える

儀式や式典も人間の創りだした文化の一つです。演劇のようなストーリーはありませんが、目的に即して全体が組み立てられています。儀式や式典では、静けさを演出する場合も含めて、音や音楽が効果的に使われます。

身近な儀式・式典にも、音楽の出番があります。私たちは、誕生・入学・卒業・成人・結婚・葬儀などの節目に、多くの儀式や式典を体験します。それらを一つの表現と考えると、決まり切ったもののようにありながら、趣旨や目的に合わせて実に多様な姿をもち、音楽も重要な役割をはたしてきたことがわかりました。それらにもぜひ耳を傾けてください。

最後に、舞楽の催しの最後に演奏される《長慶子<sup>ちやうげいし</sup>》という雅楽曲を聴いてみましょう。10世紀に活躍した源博雅<sup>みなもとのかみひろまさ</sup>の作曲と伝えられます。